市場から世界をみれば

情報システム株式会社　大谷淳一

第7回「『青の革命』は、よい革命だったのか？」

「緑の革命」は、食物栽培において、化学肥料の使用や機械化によって単位面積当たりの収穫量を画期的に向上させた。「緑の革命」と同様、機械化・養殖・蓄養などによる水産資源の確保を目的とした漁業の「青の革命」は、当初は人類の人口増加に対応する食糧増産を期待された革命であった。しかし、その実態はまったく違う方向に向かってしまった。

例えば、88年の全世界のエビ養殖事業は、180万トンの魚粉を消費した。それは900万トン（生重量）の魚から作られている。00年のアジアにおける養殖魚の生産高は570万トンだが、この漁獲に必要だった飼料は110万トンであり、この飼料を作り出すのに550万トンの生魚を必要とした。

このように養殖は、生産量よりも多くの量の飼料や餌が必要とされるのである。また、マグロ問題の項でも述べたとおり、欧州のマグロの漁獲方法は幼魚まで捕獲するものであり、資源の枯渇につながっている。そして、蓄養としていけすへ移された小さなマグロを育てるのに使用される飼料の効率と生産性も、極度に低いものなのである。実際に計算されたマグロの飼料転換率は、5%に満たない。つまり、蓄養ではマグロの体重を1キロは、牛肉と比較して2・4倍もの飼料が必要とされる計算になり、現在の地球上で最も非効率的な食糧となってしまっているのである。

マグロの蓄養も問題を抱えている。蓄養のいけすの周囲には、他の魚が近づかない。捕食魚であるマグロを避けるためである。そのため、いけす場所を次々に移転させていく。するとますます漁ができなくなる海域が増えることになり、漁民たちにとっては深刻な事態となっているのである。

海の汚染、そして餌と比較しての漁獲効率の悪さ。「青の革命」の名の下で、いったいどれほどの資源が枯渇していったのであろうか。この革命を推し進めた人々は、人類に対する重大な犯罪でなしたという自覚をもってもらいたいものである。

増やすために20キロの飼料が必要なのである。

食糧問題でよく取りざたされていることに、人類の食生活の「肉食化」が食糧を枯渇させているという話がある。その中でも「牛肉」は一番効率が悪いとされている。牛肉の飼料転換率は12・5%である。これは牛肉1キロに対して飼料は8キロ必要になる計算である。

ところが蓄養マグロの近くの漁民たちは魚が捕れず、漁ができなくなってしまった。さらに、いけすが食べ残しの餌とマグロの糞などで汚泥化して使いものにならなくなった場合、養殖業者は

【参考文献】「食糧テロリズム」（ヴァンダナ・シヴァ）

【略歴】1957年北海道美唄市生まれ。85年、食品管理、生鮮管理のシステムを開発する情報システムを創業。荷受卸売業者や食品製造会社、仲卸売業者向けのコンサルティング、セミナー、業務改革、講演を各地で行っている。主な執筆として「青果卸の業務改善」「青果卸の業務改善2」「食糧操作」などがある。